

特別支援学校高等部生徒への心理的な安定を目指した取組

-教職員の協働の促進をはかり、PBSを取り入れながら-

高度学校教育実践専攻
教職実践力高度化コース
中 李 佳

実習責任教員 大 林 正 史
実習指導教員 藤 井 伊佐子

キーワード: 特別支援学校, 協働, PBS, 心理的な安定

I 置籍校の概要および問題意識

I 置籍校の概要

置籍校は、知的障がいを中心として有する児童生徒が在籍する特別支援学校である。近隣に支援学校がないため、多種多様な障がいを併せ有する児童生徒が在籍している。隣接する障害児入所施設から、半数近くの児童生徒が通学している。児童生徒数は計 88 名（内高等部生徒 33 名）が在籍、教職員は計 58 名（内高等部教員 19 名）が勤務している（2019 年 5 月 1 日現在）。

2 自身の問題意識

数年前から、生徒の心理的な不安定さからトラブルが頻発し、教員が対応に追われる現状があった。また、高等部では、教科担当制で授業を進めているため、学級の状況や実態の引き継ぎが少ないことが課題となっていた。

教員同士で支援のアイデアを出し合い、役割を分担しながら取組を進め、結果、生徒が心理的に安定し、自立に向けた力が付くような取組をしたいと考えた。

II 2018 年度 of 取組に向けて

I 学部アセスメントより

分析結果より、置籍校は教職員の協働や学び合いに課題があり、専門性への不安があることが分かった。

2 先行研究

PBS とは、ポジティブな行動支援の略称である。「適切な行動」に着目し、その行動を増やす

ポジティブな働きかけを考え、実践する。実践では、エビデンスベースの介入を行う。

スクールワイド PBS は、PBS の考え方を学校規模で実施する。一部の問題を起こしている児童生徒だけを指導のターゲットとするのではなく、全児童生徒をターゲットとして全教員が適切で社会的な行動を教える。

小学校における先行実践では、学校全体の教員が同じ目標を共有して児童に関わるため、教員同士での情報交換が活発になり、教員集団のチーム力が上がったといった報告もある。

III 2018 年度 of 取組

I 目的と計画

小学校での先行実践を参考に、高等部学部全体で取り組む PBS を導入する計画を立てた。生徒の行動目標をまとめた「マトリクス」を高等部教員で話し合っ て決め、その目標のいくつかを高等部全体で実施することにした。

2 実践と結果 (抜粋)

①マトリクスの作成 (8 月 6 日)

学校コンサルテーションでのアドバイスを受けて、高等部でマトリクスを作成した。生徒に卒業後になってほしい姿についてまとめ、「〇〇支援学校高等部マトリクス」が完成した。

②実践 I 「自分からあいさつができる」

登校時、玄関で自分から挨拶した生徒の人数を記録に取った。対象生徒は 23 名。ベースラインになる記録を 4 日間取った後、SST を実施し

て取り組む内容を生徒へ周知し、1週間実践した。教員には生徒の行動後に肯定的なフィードバックをするよう依頼した。日頃から積極的に称賛している教員は、さらに多くのポジティブな働きかけを行い、それを見てポジティブな働きかけが増えた教員もいるように感じた。ベースライン時、自分から挨拶できた生徒は1日平均約10名であったが、実践中は平均約20名になった。

成果はあったが、標的行動の定着や般化には課題が残った。

③実践2「必要な場面で自分の意思を伝えることができる」

生徒の行動の定着や般化には、教員の肯定的なフィードバックを増やす必要があると考えた。

継続して指導場面を設定できる就業体験期間中に実践することにした。目標行動を設定し、生徒がその行動をとれたときには、行動を強化するためにポイントを得られるようにした。貯めたポイントを使ってお楽しみができるように教員へ依頼した。

生徒の実態に合わせて構成された学習グループごとに、担当教員数名が目標や支援方法を話し合っただけで、実施した。グループの担当教員によって取組には差があった。生徒には効果が見られ、設定した目標をどのグループも達成することができた。

日々の実践を担当教員で振り返り、改善を試みたグループもある一方で、担当教員での話し合いがもたれることのないグループもあった。

④チームでの話し合い

実践2終了後、教員の意見が分かれているように感じたため、今後の取組に向けてチームで話し合いをした。マトリクスの導入の抵抗感が強いことが分かった。新しいことを取り入れる

ことの抵抗感に加え、学部全体の生徒へ効果的な行動支援を行うイメージが教員に伝わっていないことが大きな課題であると考えた。高等部生徒の大きな課題は、心理的な安定であることで多くの教員と一致した。

3 2018年度の成果と課題について

記録から生徒への良い成果が見られたが、マトリクスを活用した取組については、学部全体で取り組むことの良さを教員へ伝えられなかった。そこで、学習グループを対象にし、教員の課題意識の高い生徒の心理的な安定を目指した実践を計画することにした。

生徒への般化を促すために、日々の授業実践の中で、全ての授業担当教員が肯定的なフィードバックを与える仕組みを取り入れる。

生徒の行動目標、指導場面、指導方法について教員同士が話し合い、実践できることを目指したい。

IV 2019年度取組に向けて

I 目的と計画

高等部生徒の心理的な安定を目指す中で、教職員の協働の促進を意識し、PBSの要素を取り入れる事を目的にした。計画のポイントは「指導目標が似通ったメンバーで構成される学習グループでの指導をベースに取り組んでいくこと」、「一般就労を目指している生徒が多いグループを対象にすること」、「定期的な授業実践で取り組むこと」、「般化の仕組みを取り入れること」の4点である。

V 2019年度取組

I 二層支援

一般就労を目指す生徒で構成されている□グループで、自立活動の授業実践を週1時間、計14回取り組んだ。

①「気持ちの振り返り表」

生徒は、帰りのHRの時間に、その日の授業時間ごとの自分の気持ちの状態を、4つの記号の中から選んで記入する。記入後は学級担任がチェックし、肯定的なフィードバックを返す。気持ちが不安定であったと記したときは、どんな理由でそうなったか聞き取り、次回の対処と一緒に考えてほしいと学級担任へ依頼した。気持ちが不安定であっても適切な行動がとれるようになることと、不安定な気持ちになるときはどういった状況であるのか自己理解を促すねらいがある。

②「気持ちの切り替え方」

- i. 自分のいらいらの種の確認
- ii. イライラしたときの行動
- iii. iiの行動をとった結果
- iv. 気持ちを切り替える方法の提示

といった順で説明した。その後も授業の中で定期的にいらいらしたことを話し合い、解決する時間を取った。

教員が主導で話し合いを行う場合、生徒の話を傾聴するだけでなく、どう解決するかに焦点化して話し合う必要があることが分かった。

③そのほかの取組

見えない感情を視覚的に示し、感情が累積する様子をコップで表した「感情のコップ」や、生徒のエピソードを活用して作成したワークシートを使って正しい行動を確認する「自分の考え方のくせ」、感じ方の違いに気づき、生活しやすいように解決方法を探す「感覚の過敏・鈍麻」等の授業実践を行った。

2 三層支援

①計画

学年ごとに取り組む実践交流会を、月1回実施する。学級ごとに1事例出し合い、「実践交流会記録用紙」を活用し、対象生徒の実態にとど

まらず、目標、支援方法についてアイデアを出し合う機会にしたい。

②1年団の特徴と取組

2学級4名で構成され、うち2名は他校種からの転任者である。総合的な学習や生活単元学習、行事準備等を学年合同で取り組んでおり、全ての教員が1年生全ての生徒に何らかの関わりを持つ時間がある。

授業に参加できず泣く暴れる等の行動が見られた生徒、異性間の適切な距離がとれなかった生徒、それぞれの事例について実践交流会記録用紙に沿って話し合われた。アイデアを出し合い、実践した結果、生徒それぞれの状況は改善され、教員への事後のアンケートでも肯定的な意見が書き込まれた。

③2年団の特徴と取組

3学級6名で構成され、他校からの転任者が3名、教職経験年数が5年以下の教員が2名である。心理的に不安定になる生徒が多く、生徒の実態に合わせて授業は各学級で実施されている。教員によっては、関わる機会の全くない生徒もいる。

実践交流会の記録用紙に沿って筆者が司会進行したが、生徒の実態や現在の状況、担任の対応を話すことにとどまり、目標やそのための支援について触れられることがない事例も見られた。

8月からは、他の生徒への影響が大きい生徒を対象を絞って取り組んだ。参加教員の2名は対象生徒との関わりが全くない状況であった。外部アドバイザーのアドバイスを受け、介入をした結果、生徒の行動は改善された。

VI 2019年度の実践結果と考察

I 教職員の変容

①昨年度の比較から見た成果と課題

情報交換や情報共有は促進され、学び合いが生まれたこと、職場の働きがいや、教職への意欲が高く維持されたことが成果としてみられた。これは、実践交流会やPBSを取り入れた実践によって、生徒の実態や働きかけの情報共有が進み、生徒の変容が見られたためと考える。

教職員の協働性を高めることはできず、個業化が進んだことが課題である。これは、実践交流会の内容が生徒の実態や働きかけについての情報共有にとどまりがちで、教員それぞれが働きかけについてのアイデアをだしたり、実践をしたりする機会がなかったことによるものだと考える。

②学年間の比較から分かること

1年団は、子どもの課題を話し合うことができ、情報交換や情報共有がうまくいっていると感じており、教員の高い協働性が維持され、学び合いが生まれ、低い個業性は維持された。

2年団は、子どもの課題を話し合うことが十分できず情報交換や情報共有がうまくいっていないと感じ、教員の個業化が進んだ。

このことから、実践交流会で協働の促進を図るためには、対象生徒に関わる機会のある教員でメンバーを構成し、生徒の目標・手立てを話し合い、それぞれが実践し、振り返る必要があると考えられる。

2 生徒の変容

①気持ちの振り返り表の記録から

生徒は、気分が悪すぎて正しい行動がとれなかった時間が、4月には、4日に約1時間あったが、10月には約16日に1時間に減った。

生徒の記述からも、授業で学んだ気持ちの切り替え方を、生活の中で実践している姿を確認できた。

②考察

気持ちの振り返り表の活用によって、感情のラベリング支援（米澤，2018）が行われたといえる。また、その表が学級担任と生徒の関係作りの役割を果たしている。気持ちの振り返り表の取組は、心理的な安定を図るうえで大変効果的であったと考える。

VII 取組の成果と課題と改善点

取組の成果と課題は下の表の通りである。

	実践内容	学部での協働	グループでの協働	取組についての対話	PBSの実施	生徒への効果
2018年度	マトリクス(全体)	(+)	/	(+)	(+) 一部(-)	(±)
	マトリクス(紙すき)	(+)	(+)	(±)	(+)	(+)
	マトリクス(紙製品)	(+)	(+)	(±)	(+) 一部(-)	(+) 一部(-)
	マトリクス(組み立て班)	(+)	(+)	(+)	(+)	(+)
	マトリクス(リサイクル班)	(+)	(+)	(-)	(+) 一部(-)	(+)
2019年度	自立活動授業実践	(-)	(+)	(+)	(+)	(+)
	気持ちの振り返り表	(-)	(±)	(-)	(+)	(+)
	実践交流会(1年団)	(-)	(+)	(+)	(+)	(+)
	実践交流会(2年団)	(-)	(-)	(±)	(+)	(+)

改善点は以下の3点である。

- i. 自立活動の授業実践の中で、「気持ちの振り返り表」を活用し、学級担任と連携して生徒の心理的な安定を図る。
- ii. 就業体験学習中に、学習グループに分かれて授業担当で話し合い、マトリクスを活用した実践を行う。終了後学部全体で実践共有会を開く。
- iii. 対象生徒に関わる教員で構成された実践交流会を実施する。

【参考文献】

米澤好史（2018）『やさしくわかる！愛着障害理解を深め、支援の基本を押さえる』ほんの森出版